

記念講演

成人期知的障害者の支援

—地域とコミュニケーションを考える—

小形 烈

(和枝福祉会理事)

要 旨：浅草事件は、レッサーパンダの帽子をかぶった男が短大生を刺殺してしまった事件である。弁護側は彼を広汎性発達障害だと主張しているが、彼の障害を考えると精神発達遅滞、広汎性発達障害、人格的な行動障害と分けて捉える必要があると感じた。

一方、一般的に伝わっていない彼自身の生活歴がある。地域の中でいつもいじめられていたこと、唯一の保護者とも言える、母親が高等学校時代に亡くなり極貧生活を送り父親に暴力的な態度をとられていたことなどである。また、関係していた支援機関として、養護学校、児童相談所、福祉事務所があったが、それも本人や親が助けを求めない限りは支援機関としては機能しない世界になってしまっていた。さらに、家族の関心も彼にむいていない中では何の支援も受けられない結果となっていた。そのような背景の中、彼は事件をおこした。

暴力で対応されてきた人は暴力をもって答えることがある。私たちは支援者として彼らと、どう向き合うのかを考えていかななくてはならない。そこで、我々福祉施設職員は、彼らを知り、理解し、了解しながら彼らと新たな物語をつむぎ、彼らと共に歩むことができるように、様々なアイデアを生み出していこうと思う。

Key Words： 家庭、支援機関、暴力

I. 物語の前に

拒否して生きてきたのだが、結果的にこのようなことになった。

1. 認知の障害 精神遅滞

昨年の末に判決が出た浅草事件という事件について述べる。メディアの世界では東京の浅草でレッサーパンダの帽子をかぶった知的障害者が20歳の女子短大生を刺して結果的に殺してしまったという事件である。その浅草事件からメディアを初めとしたいくつかの情報の中で気がついた点について述べる。新聞等では彼が広汎性発達障害だと弁護側は主張している。彼は札幌の養護学校を卒業、10年間ほど社会で生活し、結果、東京浅草で若い女性を刺して刑務所に入った。彼は学校を卒業する時に療育手帳等すべて捨ててしまっている。つまり、いわゆる知的障害者としての特別な待遇を

2. 性格の障害 広汎性発達障害

非常に気になった点がいくつかある。今日広汎性発達障害ということばが一般的に広く使われており、長崎で子どもを駐車場から突き落とす事件を起こした12歳の少年が、精神科医の診断により、アスペルガー症候群という広汎性発達障害であると報道されている。現在さまざまところで広汎性発達障害という障害が流布されているが、今回の「レッサーパンダの帽子をかぶった男」についても広汎性発達障害と弁護側は主張している。そこで気になるのが、知的障害児童、あるいは知的障害者の援助と生活等に携わっているものの原則として、まず知

的障害者とは認知障害ということが原則的に入り口である。IQ的な意味での認知障害という形になる。それはICDとかDSMのアメリカの精神医学協会の診断基準等々でいえば認知障害の精神遅滞ということになる。精神発達遅滞ということは、今回の「レッサーパンダの帽子をかぶった男」についてはあまり強く言われていないが、彼は札幌養護学校を出て療育手帳を当時持っていたという事実で間違いなく精神発達遅滞という認知障害があったのだらうと思われる。弁護側の精神科医の主張ではそれについてほとんど触れていなように思われる。広汎性発達障害という事については強く主張しているのだが、認知の障害であるところにはほとんど触れていないという事である。

3. 行動の障害 人格障害

「レッサーパンダの帽子をかぶった男」が精神発達遅滞と広汎性発達障害と報道あるいは主張されているわけだが、もうひとつ彼のとった行動をDSMやICD的な言い方をすると行動障害と分けることができると思う。私が得た情報の中でそういう感じを強く受けている。つまり、精神発達遅滞、広汎性発達障害、そして人格的な行動障害が、あるのではないかと感じた。彼を診断的に解釈してみると、そのような考え方、見方があると思う。

II. 困難な生活歴

1. 暴力的な父・いじめられ体験

今回の裁判、メディアを通じて一般的な市民的に伝わっていないところは彼自身の困難な生活歴である。彼は札幌養護学校の高等部を卒業し、就職をし、職を転々と変えて、今回の事件に至る前に、途中別の刑事事件を起こしている。5,6年前に起こした、函館事件といわれている事件である。彼は、函館において道路の道端で女性に対しておもちゃの拳銃を見せてお金を出せと脅したのだが、女性が機転を利かせ、「銀行へ行ってお金を下ろしてくる間、ここで待っていて」と言われて彼はそこで待っていた。当然そこに戻ってきたのは警察官だったので、彼は逮捕された。我々から見れば明らかに知的障害があるからそういう言葉でだまされた、ということである。

もう1つ私が考える彼の生活歴の中で重要なところは、彼が高等部の養護学校へ行くまでは小学校、中学校を一般の普通級に通っていたこ

とである。彼はその間連続的にいじめを受けていたそうである。小学校6年間、中学校3年間のなかで、また地域の中でいつもいじめを受ける生活を続けていた。このように、いじめを受けている人に、たびたび見られる症状の一つに、相手の顔を見てしゃべるのが非常に困難な状態の人がいる。彼の場合もほとんど人の顔を見ないで下を向いている。そのため取調官は彼の前歯が欠けているのを、裁判の席にて弁護側に指摘されるまで気がつかないでいた。

2. 母の早い死

彼は若干の知的な遅れがあるということで養護学校へ入ったわけだが、養護学校へ進学した後、じきにお母さんが亡くなっている。彼の家庭はお父さんとお母さんそして兄弟もいるが、この間極貧生活を送っていたようである。お父さんは酒やギャンブルに浸り、まともな就職もしていない。そこでお母さんのパート収入がほとんど生活の支えになっていた。またお父さんは彼に対し殴る蹴るという非常に暴力的な態度をとっており、唯一頼りになるのはお母さんだけであった。ところがお母さんが亡くなったことにより、彼の生活を心配する人が高校1年、2年でまったくいなくなってしまった。その後は彼の生活、人生についてまともに対応する人が、全くいないという中で過ごしてきている。このように、15,6歳で本人のことを親身になって考えてくれる人がいないという世界に彼は投げ出されている。

III. 関係したであろう支援機関

1. 養護学校

われわれのように入所施設や通所施設を運営していると、15,6歳でほとんど投げ出されたような生活をしている人が、福祉的支援を受けずに生活していて、何の事件も起こさないというほうがむしろ特殊な例であり、彼らはその生活の中で何らかの事件を作り上げてしまうこととなり、社会にうまく適合していくという事の方がむしろ難しいし、その方が稀有な例だと思う。15.6歳で彼のお母さんが死んだ時点で彼は、何らかの反社会的な事件を起こすとして当てはめられていったと言えるだろう。しかし、あえて言えばそのような生活歴や障害を持っている人に関係している機関が現実にはその時にある。つまり彼は札幌養護学校を卒業しており、その時点では養護学校という機関が

彼と関係をしているのである。また養護学校の紹介で就職もしているのだから養護学校と深く関係しているという事も事実である。しかし、家庭基盤がこんな脆弱な人に通いの就職を紹介する養護学校というものの自体がどうであろうか？ よくある例だが、生活基盤が脆弱な人には、グループホームに入所し生活の基盤を作ってから仕事に行くようにはたらしかけるなどの方法がある。札幌養護学校では、まともな就職もしない、本人には暴力で対応するお父さんのもとから就職させていたので、半年ほどで最初の仕事を止めてしまったということは当然の結果とも思える。

2. 児童相談所

もうひとつの彼と関係している機関としては児童相談所である。彼がそういう困難な生活を送っているという事を児童相談所はずっと長く相談に携わっているのだが、周知のように日本全国の児童相談所では障害を持った人たちや、困難な生活をしている人たちに対して具体的な支援援助をする事はほとんどないというのが現実である。親が悲鳴を上げて助けを求めない限りはまずもって支援をすることはない。または子供本人が児童相談所へ助けを求めに駆け込む事はほとんどありえない。今の日本のシステムでは児童相談所は相談に来た人しか対応はできないのである。親が関係ないと思っていれば誰も児童相談所に相談に行かず、また、今後の事を相談しに行く人もいないという事である。つまり、「レッサーパンダの帽子をかぶった男」についても児童相談所はほとんど関係を持たなくなっている関係であったということである。

3. 福祉事務所

もうひとつ、彼は卒業するまで養護学校に行っていたということは、療育手帳を持っており、当然、療育手帳を発行する福祉的対応する福祉事務所が彼のことをつかんでいたであろうと推測される。横浜の場合を言えば、今回の支援費制度に至るまでの2、3年前まで、養護学校の高等部3年を卒業する時は福祉事務所と一回相談をするというルールがあった。ところが今回支援費制度になってからは本人の意思で相談するという事になってしまったので必ずしも本人が相談するかどうか分からないというのが今日の支援費制度の姿である。彼が札幌養護学校を卒業した約10年前札幌の福祉事務所

所がどういうルールになっていたかということは不明であるが、おそらく相談しないで終わっているのではないかと想像できる。ただ、彼の何らかの福祉事務所の記録、最低限名前だけはあるのだろうと思われる。あるいは福祉事務所のワーカーが1回くらいは相談に乗ったということがあるかもしれない。彼と関係しただろうと思われる支援機関は養護学校と児童相談所と福祉事務所があり、本人や親がそれを求めている限りはまったく関係のない世界になってしまう。養護学校を卒業したとはいっても、養護学校の高等部も義務でないので、3年間在籍してただけで、学校へ行っていなくても、自動的に卒業ということになる。よって、「レッサーパンダの帽子をかぶった男」が札幌養護学校に3年間どの程度通ったのかということは定かではない。保護者が養護学校に助けを求めない限り養護学校側が、無理やり本人を養護学校へ連れてくるということはいっさいないし、親からのこういう教育をしてほしいという要請によって初めて「協力できる」か「できないか」という協議になるのだが、保護者の方が学校へ通わせたいという意味を表明しない限り、籍だけあってもそのままということが養護学校の全国ルールだと思う。

そして、これは児童相談所についても同じである。保護者の方から援助を求める相談がない限りは児童相談所もこんなサービスがあるというような相談はしない。又これは福祉事務所もまったく同じである。つまり彼が知的な発達遅れの遅れという障害を抱えていても本人1人では誰もそれについて援助を差し伸べるというシステムになっていないのだというのが現実なのである。そういう中で今回2年前に導入された支援費制度というのは本人の意志で決めるということになっているので、いわゆる措置制度をなくすということで知的障害者等々に対しては措置制度がなくなった代わりに支援費制度になったことで本人が希望した制度を使うということになる。「レッサーパンダの帽子をかぶった男」については本人がそのような支援をまったく拒否していると彼は何の支援も受けられないということになる。多くの場合は障害を抱えている人の将来を心配して親兄弟が支援機関に相談に行くのでそこで何とかなっているという部分がたくさんあるが、彼の場合はお母さんが早く死んだことにより、彼に興味を持っていないお父さんという家族の中では彼は何の支援も受けられなかったという

結果になっている。そういう事態の中で彼が生きてきたんだということをもう一つ確認していかなくてはならないのである。

今回の事件から分かるとおり、まず障害という形でいろいろな診断がされるわけである。横浜の場合は現在ほとんど3歳位で広汎性発達障害の診断をものすごい数で受けているというのが現状である。しかし、そういう診断を受けても具体的な援助システムがないというのがもう一つ日本全国の社会の中の問題なのである。そういう診断後の支援問題と、もう1つ今回の事件の背景には困難な生活歴があるわけだが、それについても現在は支援費制度になったため、誰も関知しないという事態が日本の社会の中で展開されているわけである。この事件が10年前の横浜で起きた事件であったならば福祉事務所の責任が問われたところであるが、今の制度の下では福祉事務所の責任を問われないのである。現在は支援費制度なので、福祉事務所は本人や家族が希望しない援助は何もしない。そういうシステムになっているというのが社会の現状である。

そのような現状について、私自身も考えるところは多々あり、多くの方々にもそういう事態があるという事を認識してほしい。彼が10年の放浪の末、刑事事件を起こした末、若い女性を刺してしまった時、冬の寒い時期彼は頭にレッサーパンダの帽子をかぶり、足は素足にサンダル履きで浅草の街で若い女の子に声を掛けた。声を掛けた理由は若い女の子に興味があり、口を利いてもらいたいという軽い気持ちであった。殺されてしまった女の子が非常に不幸な事態だったのは、その若い女の子がボランティア活動の経験があり、そこで知的障害者のボランティアをしたことがあるということだった。普通、知的障害者と接したことの無い若い19、20歳の女の子ならばレッサーパンダの帽子をかぶったサンダル履きの男が声を掛けてきた場合、逃げるなり、さっさと行ってしまうのが一般的な行為だと思うが、彼女は偶然ボランティアで知的障害者のことを多少知っていたということである。そこで彼に一応「なに？どうしたの？」というような対応をしたらしい。すると彼がもっと話しかけよう、もっと仲良くなろうと欲求がエスカレーションしていく。すると当然のように若い女の子はいやだなと恐怖心を持つ事態になる。すると彼はその対応に逆上して「なぜ、僕が話しかけるのにそんな態度をとるのだ！」と、ついに包丁で刺して殺し

てしまうという結果になった。「レッサーパンダの帽子をかぶった男」の父親であろうと、殺された若い女の子の父親であろうと、どちらにも怒りや悲しみを感じる事態になったのである。とりわけ女の子の親御さんとしてみれば、耐え難い事態であり、娘が何でこういうことにあわなければいけないのかということになるのである。一方私たちは知的障害者の援助の仕事をやっているのだから、この「レッサーパンダの帽子をかぶった男」について考えなければならない。結果的にはこの「レッサーパンダの帽子をかぶった男」は無期懲役の判決を受けた。当時30歳位で、20～25年位は刑務所に入っているわけなので、50歳過ぎた頃には出所してくるのが一般的である。20年30年先のことは社会がどうなっているか分からないが、結果的にこのように刑務所に入ってしまうということになる。

横道にそれるが、最近山本譲二さんという元衆議院議員が刑務所に入り、刑務所の中の話をしているが、大体1割くらいは知的障害者ではないかと言われているということである。

IV. 物語の後に

1. 人間であること・男であること

女の子を刺してしまったと男ということでは特殊な存在であるが、多くの女性であろうと男性であろうと30歳位の人が、人に何も話しかけないでずっと生きていくということは非常に難しいことである。彼が若い女性に対して話し掛けたい等の、さまざまな美意識を持って女性に接すると言うのは当然のことであるのだが、事態は悲惨な結果を迎えた。問題は女の子がだんだん恐怖心を感じた時に、更なる暴力で対応する彼、つまり「レッサーパンダの帽子をかぶった男」の男がいるということである。しつこくそばに寄ってくる軽度の知的な発達遅滞の男性に対して、女性がだんだん拒否的になった時、それに対して包丁で刺すという更なる暴力で対応する。これが彼の行動的な障害である。やくざや暴力団の世界では普通にあることなのだろうが、多くの場合、相手が強い口調で拒否した時にさらにそれ以上の強い力で対応するというのは少なくとも我々先進国の多くの人間は良い事とは思っていない。例えば、自分が若い女性に声を掛ける、あるいは同級生とか、同僚に声を掛けて、つっけんどんにされたら、早々にさっさと引き込むというのが自分

なりの対応だと思う。それに対して、なおくいきがる人の方が一般には少ないのだと思う。原則的に女の人はそういう人はほとんどいない。男の人ではたまにそういう人がいるのだが、それがどういうことなのかまだよく考えていないが、男であることの特徴の一つかもしれない。

2. 暴力で対応されてきたこと

暴力で対応されてきた人は暴力でもって対応するということである。親に殴られて育ってきた子どもはまた子どもをなぐるということである。典型的なのは池田小学校で小学生たちを刺し、昨年死刑が執行された宅間という男である。彼はものすごく父親に殴られて、殴られて育ち、最後池田小学校で子どもたちを刺し、こんどは自分を死刑にしろと言って開き直り、死刑になった。暴力から暴力を繰り返していくという典型的な形である。

また、奈良の小学生を殺してしまった小林薫という男、「レッサーパンダの帽子をかぶった男」と同じで、中学生位の時にお母さんを亡くし、お父さんに殴られ、殴られ生きて来た。子どもの時から友達ができない状態であり、30代にて小学生を殺してしまうという、まさに犯罪が起こるべくして起きた。宅間にしても「レッサーパンダの帽子をかぶった男」にしても、小林にしてもそうなのである。暴力で対応されてきた人が最後暴力で対応するのではないかということが自分自身の知的障害児・者の福祉の仕事長くやってきている実感である。知的障害をもった仲間たちの多くも暴力で対応されてきた人は暴力で対応してしまうという事を多く検出しているのである。そこで私たちが彼らにどう対応するのかということが、保護者や私たち援助者として非常に考えなくてはいけないことと思う。

V. 新たなる物語を

1. 知ること・理解すること・了解すること

現代の中で我々社会が抱えている典型としてひとつあるのは、人は人、自分は自分という個別化という時代の中に私たちは生きているということである。その典型的なのは個人の携帯電話を持っているということである。社会や家族で電話を共有しない。共有物がどんどんなくなっている社会で、どんどん個別化している社会になっている。支持性が広がっていく社会だと一方で言われている。自分が自分と言う

支持性がどんどん広がり、自分らしくあろうという社会のメッセージが広がっていく中で、障害者も個々人であるというメッセージが広がっている。「自分が自分の好きな援助を選んだ」という形で広がり、支援費制度の形になっていく。そうした中で個別化、支持性が広がっていく。すると、結果的には本人が援助を受けられるということを知らなければ受けられないと言うことにもなる。要するにひとりひとりが孤立化しているということで、一見自由に見える。私達は自分が自由であると言うことは同時に自分が孤独で不安であるということ、事実不安であるということが背中合わせになっているということを感じるところである。しかし、知的障害を持った仲間たちにそれを伝える事はほとんど絶望的であると思える。知的障害者はもとより若い職員にも、「自分の責任で生きろよ」とは言いにくいのである。「あなたは自由だから自分の苦しいのを自分で受け止めなさい」というようなことは「冷たいのではないの?」と。私の立場上、不安や絶望感、孤独感について、共有したり理解したりしなくてはいけないのだろう。ただ、社会の中でのメッセージは「そういう孤独感、孤立感、不安感は自分の問題だよ」と動いていると思う。そういう社会の流れの中で私たちの障害者の支援システムというのは、あるいはコミュニケーションというのはどう成り立つのだろうかと言う新たな物語を私たちが作っていかねばならないと思う。さまざまなことが分解されている中、逆の意味で私自身は自由であるとは支持的で作れるということなのである。逆の意味で、自分たちが努力すればこういうことができるんだと言う可能性がある保障されている社会になるのだと思う。もちろんそれは物理的に、金銭的に、人的には保証されていない。私たちの支持性がそこに許されているんだと言う逆の一面があるのだと思う。そのために今私たちは何をしなくてはいけないかということである。そのためには私たちが知ることを求められているのだと思う。援助について考えること、今回のような「レッサーパンダの帽子をかぶった男」の事件について知ること、そしてそのことについて興味を持つことであり、なんでこういうことがあり得るのだろうと理解していくことに意味があるのだろうと思う。例えば今回の奈良の女子小学生を殺してしまった小林薫についてどういう了解が私たちにできるのか考えてみる。小林薫という男は性的な倒錯だと

思うが、最近、小林薫という男が逮捕されてすごく思ったことがひとつあり、テレビでいわゆるオネエキャラといわれる方が、バラエティ番組に必ず一人いる。山崎トオルくん、かばちゃん、暇屋崎さん、おすぎとピー子……。彼らはいかなれば性的な倒錯なわけである。彼らが性的な倒錯を芸能界で生きていくことに生かしていれば十分に良いのである。しかし小林薫という男は明らかに性的倒錯者だと思われるがそれを生かしてはいないのである。彼が女子高校生のグッズを渋谷で買っている分には問題にならないが、それを盗んでしまったところから犯罪が発生している。いわゆる下着泥棒となる。それがどんどんエスカレートして今回の小学生を殺してしまうという性的倒錯、欲望がエスカレーションしているのではないのかとそんな了解をしている。

VI. 私たちのアイデア

「レッサーパンダの帽子をかぶった男」についてもそのような了解をしているが、そのような中で私たちにできることというのをもう一度考えてみなければならない。それが自分にとってあまりにも拒否的ないやな事件であって私たちにとって、これはどういうふうに理解了解したら良いのか、ということがないと次の仕事に生きていく援助に対するアイデアが浮かんでこないのではないかと思う。それが私自身のアイデアだと思っている。そんなにオリジナリティはないが、今後こういうアイデアで、こういう援助ができるのではないか、というアイデアを考えていきたいと思う。そういうアイデアを考えつくにはさまざまな事件や、さまざまな障害をもった仲間たちを了解していくといったことが必要ではないかと思っている。さまざまなことを了解して、理解して、知って、それから私たち自身のアイデアを紹介していきたいということである。